

東京大学国文学研究室所蔵『袖中最要抄』について

吉野 朋美

はじめに

最近、東京大学国文学研究室に『袖中最要抄』と題された書物が収められた（函架番号、中世一・二・五七）。同書は、院政期末、六条藤家の論客顕昭によつて著された歌学書『袖中抄』を抜き書きしたものである。『袖中抄』には複数の写本に加えて慶安四年版の版本もあり、後世広く流布した歌学書であるが、その抄出本は珍しいと思われ^①。今のところ他に伝存するものも見いだせないため、本書の書誌、抄出の姿勢など基礎的な性格を検討しておくことは、『袖中抄』研究においても、また、本書の書写時である室町時代中期の和歌をめぐる状況を知る上でも意義のあることだと考える。以下、本稿では『袖中最要抄』について、書

誌的な紹介を中心に検討・考察をおこないたい。

一

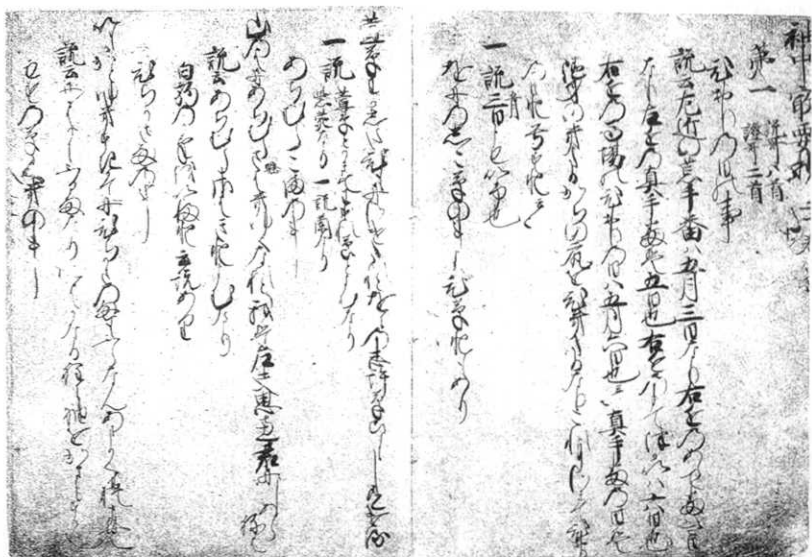
はじめに、本書の書誌ならびに奥書について検討する。本書は『潮音堂書跡典籍目録』5（平成一五年秋）に掲載されており、同目録では次のように書誌を記す。

「聖護院道興法親王筆 寛正三年（一四六二）写／
18・5×13・5種 綴葉装 箱入 極稀本／卷十九・
二〇に四丁分欠落 一丁文字汚れ有 本紙左右少切
れ／表紙等欠 虫損補修済」

また同目録は「本書は顕昭による歌学書『袖中抄』二十卷を、その書名が示すように、簡要にまとめたもの、惜しくも欠丁が認められるが、この書名では他に伝存するもの

を聞かない」との解説文も付す³⁾。なお、はじめにこの目録に不足する書誌情報を加えておく。本書は墨付六八丁、遊紙一丁(六九丁め)、表紙は欠損し、余白だった一丁オに後代の題簽が貼られている。料紙は鳥の子紙か。

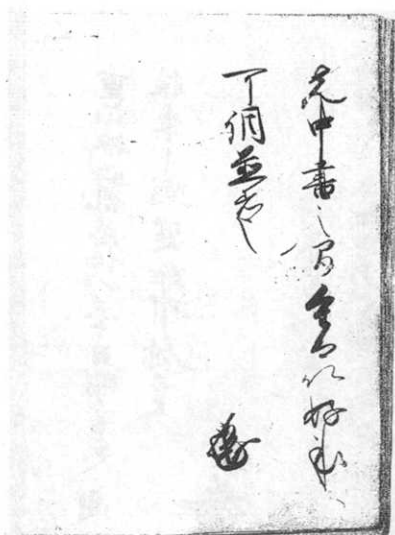
さて、目録には「聖護院道興法親王筆」とあり、本文と共紙の表紙(元来は一丁オ余白にあたる部分)にも後代の手蹟による「聖護院殿道興」の題簽が貼られているが、まず本書の筆者が聖護院道興と考えてよいか、道興真筆の『古今和歌集』(国文学研究資料館蔵、請求記号九九・三)と比較して確認しておきたい。図版に挙げたように、双方を一見するとかなり似た字であることがわかるが、さらに細かく見ても、「乃」「む」「里」「幾」のくずし方や字形、「登」の筆の入りが長く下まで来ている点などが一致し、花押もよく似ている。確かに道興の真筆と考えて間違いないだろう⁴⁾。なお、道興は法親王ではない。



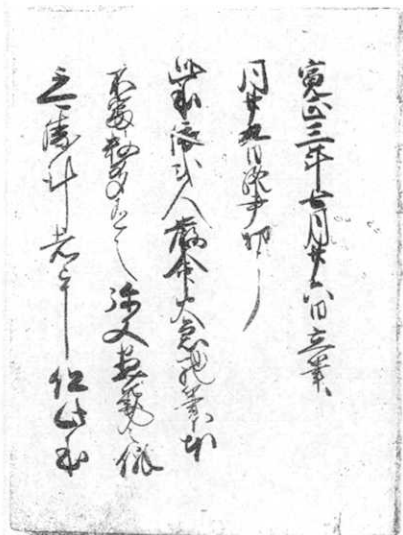
(2オ)

(1ウ)

『袖中要抄』冒頭



(68ウ)



(68才)

「袖中最要抄」奥書（花押）

次に、本書の奥書について考えてみたい。まず翻字し、訓点を施したものを以下に示す（□は実際は改行していることを表す）。

寛正三年七月廿六日立筆、同廿九日終書功了、

此本依或人嚴命火急馳筆、本不審数多有之、

弥又愚筆之儀

不可勝計者畢、但此本先中書之間、重而以好本

可調置者也、（花押）

奥書には、道興が「或人」の嚴命によって寛正三年（二四六二）七月二六日から二九日の三日間で急ぎ筆写したものであること、この本には多くの不審があり、また自分の字の汚いのは数え切れないこと、この本はまず浄書の前に善本と対校して内容を整理すべきこと、が記されている。

筆写を依頼した「或人」が誰かはわからない。が、聖護院道興に依頼するくらいであるから、貴人であることは確かだろう。道興は応仁の乱後、しばしば古典の組織的書写活動の際の書写者の一人として名が見え、文明一二年（一四八〇）七月には『拾遺和歌集』書写の勅命を受けており、先に挙げたように、文明三年（二四七二）に大内政弘の依頼で道興が書写した『古今和歌集』写本も現存している（国文学研究資料館所蔵）。また『袖中抄』の版本のうち慶安四年

瀬尾源兵衛板、内閣文庫蔵内務省本（函架番号二〇一・七五八）には、第一の目録を記した10丁オの裏の余白一丁分に、校合本に記されていたとおぼしき注記、すなわち元禄十年秋に古筆了限の記した「袖中抄十冊御筆者目録」が写されており、それによると「第一 聖護院殿道興大僧正」とあって『袖中抄』第一の書写者が道興であることがわかる。実際『実隆公記』長享二年（一四八八）四月一三日条、一九日条から、足利義尚が実隆等に『袖中抄』十巻本の分担書写を求めているのがわかることから、道興が義尚の命で『袖中抄』を分担書写していた可能性も大いに考えられる。

このように見ると、道興が本書を筆写していても何ら違和感はないし、朝廷・室町幕府ともに深い関わりのある道興に書写を求める貴人も限られてくるかもしれない。唯一、本書の場合、書写年代が現在知られる道興の書写活動に比べて飛び抜けて早いのが気になるといえば気になる点である。

さて、この奥書からは、聖護院道興は本書作者ではなく筆写者であること、また道興は書写しながら本書に「不審」が多くあるのに気づいていること、本書が善本で対校して誤謬を正すべき内容だということ、但し或る人の「嚴命」で急いで書いたということは、「或人」が急いで手に入れた

いほど価値のある本で、しかも、対校すべき善本があるような流布状況だったこと、などが読みとれようか。

後述する本書の内容からして、これが詠作の際に難解な歌語をめぐる諸説を簡便に参照できる便覧のようなものとして用いられていたと想定するならば、諸本が流布していても不思議ではない。が、実際には現在のところ他に伝本が見えないため、本書の内容が巷間に広く知られていたかどうかは、慎重に判断すべきだろう。

二

ここでは、筆写者である道興がどのような人物だったのか見ていきたい。関白近衛房嗣男の道興は、永享二年（一四三〇）生まれと推定される。幼くして出家し、天台宗の顯密両教を学び、文安四年（一四四七）十八歳のときに伝法灌頂を受けて、聖護院門跡第二四世となる。その後、園城寺長吏、熊野三山ならびに新熊野檢校を兼任、大僧正に任じられ、寛正六年（一四六五）に准三宮となっている。病氣平癒や加持祈祷などを通して室町幕府と密接な関係を持ち、後土御門天皇の玉体を持するなど門跡寺院の門跡として皇室とも深いつながりを持つ一方で、修驗道本山聖護院の門跡として若い頃から巡歴の旅を重ねるなど、文龜元年

(二五〇二) 七二歳で没するまで、⁽⁸⁾ 精力的な活動を展開した。⁽⁹⁾

一方、本書にもかかわる道興の文学事績を見ると、その著作として有名なのは、文明一八年(一四八六)六月から翌年五月にかけておこなわれた東国巡歴時の詩文紀行文『廻国雑記』である。同書が旅の行程を日次で書きつつ、なかに自身の詠歌や詩文を多数収めることからわかるように、室町文化の中樞を担う撰閲家を出自とする道興にとつて、和歌や漢詩、連歌等は若いときから年長に至るまで好んでいたものだったようだ。長祿三年(一四五九)には、すでに百首歌を詠み、一条兼良に合点を請うている。その後も諸国巡歴のかたわら門跡歌人の一人として積極的に朝廷・幕府主催歌会にも参加、詠作をおこない、前述したように勅撰和歌集や撰歌集、歌学書の書写活動もおこなった。⁽¹⁰⁾ 文明一五年成立の足利義尚撰『新百人一首』には序文を記している。⁽¹¹⁾

本書を道興の文学事績の中に位置づけるならば、百首歌などを旺盛に詠みはじめたころの書写活動であることに注目すべきだろう。難解な歌語の説明を抄出したものを書写していく行為は、道興の和歌活動にも影響を与えたと思定される。また、難義の歌語として挙げられるなかに、多く陸奥国をはじめ地方の風物や習俗を詠む際に用いられた語

があることを考えると、後年の作ではあるが『廻国雑記』に収められる詠歌との関わりでも注目すべきだろう。たとえば目に付いたものを挙げると、『廻国雑記』冒頭付近に出てくる北陸廻国巡礼時、柏崎で詠んだ「おしなべて秋風ふけば栢崎いかゞ葉もりの神はすむらむ」の「はもりの神」⁽²⁷⁾、下総国「こほりの山」を過ぎ上総国へと野を分け行く途次に紫苑という花を見て詠んだ「尋ねみむあだちが原のしるべかも此の野にあへる鬼の醜草」の「鬼の醜草」⁽²⁾、陸奥廻国巡礼時の詠歌に詠まれる「武隈の松」⁽²³⁾、「末の松山」⁽²⁴⁾などは、いずれも有名な歌語・歌枕ではあるが『袖中抄』でも取り上げられており、その言説と詠みぶりに注意してもよいだろう。

本稿では紙幅の都合上詳細な検討は叶わないが、道興の実作と本書『袖中抄』の抜き書きとの関わりは、今後検討に値する問題であり、その検討は、本書の内容についての詳細な検討・全文の翻刻とともに後稿を期したい。

三

ついで、本書の実際、ならびに内容がどのようなものか考えてみたい。はじめに述べたように、本書は『袖中抄』の抜き書きであり、基本的には『袖中抄』で取り上げられ

説明されている二九八の歌語全ての項目が『袖中抄』と同じ順番で並び、抄出されているものである。ただし、目移りのためか、「53とよのあかり」（二丁ウ）の項目だけが抜けている。

また、一で掲出した『潮音堂書跡典籍目録』に指摘されるように、本書には一丁分の「文字汚れ」と数丁の脱落箇所がある。翻字を施していくと、一丁分の「文字汚れ」箇所とは巻十八掲出の最後の歌語である「246しのぶもちずり」に関する説明部分と巻十九の「説哥／證哥」の数が書いてある標目部分の一丁（五七丁オ）であるが、実際は残念ながら「文字汚れ」というよりも擦り消されている形である。どういいう経緯でそのようなことになったのかは不明である。

同じく目録に指摘される巻十九・二〇の四丁分の欠落箇所は、歌語で示すと、五九丁ウと六〇丁オの間にあるべき「258いしづみ」「259うれりめ」「260えびすのみよりいだす血」「261ほやのすゝき」「262あまとり」、六一丁ウと六二丁オの間にあるべき「271をぶちのこま」「272はねかづら」「273うけふ」「274どくきのや」、六三丁ウと六四丁オの間にあるべき「283めもはる」「284やまのとかげ」「285ひかた」「286そつひこまゆみ」、六五丁ウと六六丁オの間にあるべき「294ねやはらこすげ」「295となりにはなひる」「296うどはま」「297はもりの神」

である。綴葉装（大和綴）のため、綴じ直しか何かの際に料紙二枚分が紛失したということになろう。

四

最後に、内容について検討する。本文部分だけで六六丁に及ぶため、本稿ではその全てについて言及することはできないが、以下、冒頭数丁を翻刻し（改行箇所）を挿入、本書がどのような方針で『袖中抄』を抄出していたのか、その方法の一端を垣間見てみたい。なお、歌語各項目に『袖中抄の校本と研究』による番号を付す。

袖中重要抄 二十卷

第一 説哥八首／證哥二首

1 ひおりの日の事

説云左近の荒手番は五月三日なり右近のあらて番は四日なり左近の真手番は五日也」右近のまてつがいは六日也」右近の馬場のひおりの日は五月六日也云々真手番の日は「隨身のきたるかちの尻をひきたるなりこれにつけてひおり」の日と号すと云々」

一説三日ともいふ也」

2 をにのしこ草の事よひ草ともあり」 「一ウ

萱草わがしたひもにつけたれどをにの志許草事にし有ける」

一説 萱草とかきてわすれ草とよむなり／紫苑なり 一説蘭なり

3 あちむらこまの事」

山のはにあちむらさはきゆくなれと我は左夫思恵君にしあらねは」

説云あちむらさはきとよむなり」白駒のかけをいふと云説あり」

4 ひちかさ雨の事」

いもかかとゆきすきかてにひちかさの雨もふらなんあまかくれせむ」

説云にはかふる雨なり にはかなる程に袖をかさにする也」

5 もすの草くきの事」

春しあれはもすの草くき見えすとも我は見やらん君かあたりは」

一説もすの草をくゝるといふなり」一説もすのいたる草のくきのとをりに我家のあるよしを人に」をしへける事のあるをいへるなり」 一説もすのはへにへを草のくきにさす程にもすの草くきと」いふなり」

6 かひやかしたの事」

朝霞かひやかしたになくかはつこゑたにきかは我こひんやと」

一説かい子かう屋なり」 一説魚をとるとて川の糸につくりたる屋なり 「二ウ

7 おきつしら波立田山の事」

風ふけはおきつしら浪立田山夜半にや君かひとりゆくらむ」

8 くものはたての事」

夕くれは雲のはたてに物そ思ふあまつ空なる人をこふとて」 一説雲のはたてににたる也」 一説空のひろき事をいふなり

其におなし事なり」 一説くもの手をくものはてとも云也」

しにたるくものかせにやれて手のはたらくをみて 重之」

さゝかにのくものはたてのさはくかなかせのくものいのちなりけれ」 「三オ

9 あけのそほ船の事」

旅にして物こひしきに山もとのあけのそほ舟近にこく見ゆ」 説云にをぬりたる舟也」 あからを舟ともいふさにぬりし小舟とも云」

おきにゆくあから小舟とつとやらんわかき人みてときあけ

んかも」

そほとはちいさき心なり伊勢物語にも雨そほふりたる」

あられそほふるなといへり」

第二 説哥一四首／證哥一首」

10 我名もみなとの事」

大かたは我名もみなとこきいてん世をうみへたに見るめす
くなし」

「三ウ

説云我名もみなとのかれたるなり世をさるにたとへたる
也」

11 たちづくりえの事」

萬代を君かまほりといのりつゝたちづくりえのしるしとを
見よ」

説云名所にはあらず太刀をつくりえたる也」

12 たなはたつめの事」

わかためとたなはたつめのそのやにおるしら布はおりてけ
んかも」

説云七夕妻の我かめとまとはかよひたる 七夕ひめと」

いふ也ぬひめと云字をつめとよめる也」

13 鳥かなくあつまの事」

鳥かなくあつまおとこの妻こかれかなしくありけんとしの
緒なかみ」

「四オ

一説日本武尊橘姫をうしないて吾妻はやとうすいの峯」
にていひ給し其よりあつまとはいへり」

一説天鷲は東南にたく程に鳥がなくあつまとはいふ也」

14 いそのまゆの事」

いそのまゆたきつ山川たえすあらは又もあひみんあきかた
まけて」

説云磯の間より川のなかれおちたるなり

由にはよるの心なり

15 よしゑやしの事

よしゑやしきまさぬ君をいか、せんいとはぬ我は恋つゝお
らん

一説そはと云心なり又あらはあれと云心也又よきかなや
と云心也

一説與義綺語抄云男の名也云々又よしと云心あり

と云心也

「四ウ

まず、各巻のはじめに「説哥」と「證哥」なる分類を設

けている点が注目される。「袖中抄」本文にはそのような分

類は見えないからである。本書では何が「説哥」であり、

何が「證哥」なのだろうか。

巻の第一には歌語が九項目立項されており、そこには十
首の歌が挙げられている。その数からすると、各歌語の説

明に直結する歌、いわゆる出典にあたる歌が「説哥」、歌語に直結するのではなく、説明の一環として、或る説の証歌となるような歌を「證哥」と称しているようである。つまり第一のなかでは「8くものはたての事」に挙がる「さ、かにのくものはたての……」詠が蜘蛛の手を「くものはたて」とする説の証歌ということであり、「9あけのそほ船の事」に挙がる「おきにゆくあから小舟と……」詠が「あからを舟」ともいう、という説の証歌なのだろう。翻刻部分からははずれているが、第二には「説哥一四首／證哥一首」とあるが、やはり歌語の説明に直結する歌が一四首、「20いそなつむめさしぬらすなの事」に挙がる「きのくにのなくさのはまにかいひろふあまのめさしのおとなりせは」という一首が、「めさしのわらへなる證哥」なのである。

こうした分類は、作者のどういう意識にもとづいたものだろうか。推測だが、やはりできるだけ簡潔に、知りたい情報をわかりやすく呈示するという方針がこの分類をもたらしめているのではないだろうか。はじめに、この巻には歌語の説明に要される歌が何首あり、補足説明に用いられる歌が何首あるかが示されていれば、歌が列挙されていても見当を付けやすいだろう。

ついで、本文を一見して気づくのは、一つ一つの歌語の

説明が相当短く抄出されていることである。また、『袖中抄』では一つの歌語に対していくつもの説明が付されているのだが、本書ではその全てを抄出しているわけではない。どのような基準で説を取っているかは、本書作者の態度を知る上でも重要と思われるので、翻刻したいいくつかの歌語を例に検討してみたい。

たとえば「1 ひおりの日」だが、『袖中抄』では顕昭は「左近馬場のひをりの日は、天下第一の難義」という顕輔の言を引きつつまず自説を展開し、俊頼のエピソード、『綺語抄』、『奥義抄』、『和歌童蒙抄』に挙がるさまざまな説を列挙して自身のコメントを付している。一方本書は、まずこの語の出典が何であるかにもふれず、顕昭がはじめに述べた説のうち、左近荒手結は三日、右近荒手結は四日、左近真手結は五日、右近真手結は六日という点を断定的に挙げ、顕昭の説の最後に挙がる「右近の馬場のひおりの日」が六日であること、なぜ「ひおりの日」というかについての要点のみ挙げる、というかたちである。その結果、本来この語が問題とされるもとなった『古今集』恋一の業平詠の詞書「左近の馬場のひをりの日」についての説明はなされていないのである。では、1と異なり、複数の説を列挙する「5 もずの草ぐきの事」などはどうだろうか。

「もずの草ぐき」の場合、本書が抄出するのは『袖中抄』で列挙している説のうち、顕昭の述べる（もずが草をくぐる）という説、『奥義抄』の述べる男女の野原での逢瀬と後日譚のうちの（私の家はもずのいる草の茎のほうにある）と女が述べた一部分、『万葉集抄（秘府本万葉集抄）』の述べる（もずの早贄）の話であり、『和歌童蒙抄』の言う（もずのは山城国の野）（くさぐさは草の茎）という説や、『俊頼髓腦』の（もずの草ぐきは霞をさす）という説は挙げている。さまざまな説に対して本書の作者なりに取捨選択が働いているということだろう。一方で、顕昭が「確かに見えたる事なし」として排除した『奥義抄』の説は排除していない。そして、結局この歌語が何を意味するのか、ということを追究せず複数の説の並立で終わらせているのが『袖中抄』と決定的に異なる点である。『袖中抄』の文章が、考証は膨大だが顕昭自身の考えへと求心的に向かうのに対して、本書は難義に対して一つの解を求めよう、としないのが特徴と言えよう。

『袖中抄』は、自説のみならず、さまざまな説を詳細に列挙し検討・考察を加えていく点こそが顕昭著作の面目躍如たるところなのだが、本書『袖中重要抄』では、その詳細な説明が省かれ、場合によっては問題となる語の出典ま

で省略されている。また、『袖中抄』ではそれぞれの説のはじめに「顕昭云」「私云」「奥義抄」「綺語抄」などと記し、その説の出所がわかるようにしているのだが、本書の場合多くは「一説」「説云」と抽象化し、とにかくその歌語にどんな説明がついているのかさえわかればよい、という態度である。本書が『袖中抄』の難義に向かう姿勢とはまるで異なるコンセプトのもとで作られていることがわかるだろう。膨大な情報量をコンパクトにまとめ、難解な歌語の由来やそれに対してのさまざまな説明を手軽に教養として知る、あるいは時々に応じてその説明を実作に生かしていく、そういった要求に応える歌書の一つが本書ではなかったか。折しも時代は、膨大な情報量と圧倒的な存在感を持ち、儀式や故実、能、連歌、和歌に必要な知識の宝庫であった先行の文献が抄出され、必要な情報に応じて再編される時代であった。そうした傾向は、当時、古典の知識を求め人々、和歌や連歌をたしなむ人々の裾野が広がっていたことと無関係ではない。本書はそのような時代の要請に合致したものであったといえよう。

おわりに

本書の問題点として、『袖中抄』諸本の本文と異なる『万

『葉集』の本文を持つ歌があったり、『袖中抄』の挙げる諸説のなかでもマイナーな一説をピックアップしてあたかも主要な説のように述べたり、諸説のまとめ方がおかしくて複数の説をあたかも一説のように述べたり、という点が挙げられる。たとえば、万葉歌については、それが本書の勝手な本文改変なのか当時の『万葉集』本文享受の問題なのか、という点にもつながってこようし、奥書で道興が述べている「不審数多有之」という言説にもかかわってこよう。前代の歌学書をただ抄出しただけと言えはその通りだが、その抄出しただけの本書は、その成立した時代状況、作者や書写者の思惑を密かに映し出しているのである。

【注】

(1) 但し、『袖中抄』の初撰本と考えられてきた『顕秘抄』について、日比野浩信氏はむしろ『袖中抄』の抄出本の可能性があることを指摘されている（和泉書院影印叢刊『志香須賀文庫蔵 顕秘抄』解説、和泉書院、一九九八年）。『顕秘抄』は、『袖中抄』が説明を施す歌語二九八項のうち四一項を抄出し、ほぼ同内容で記したものである（『日本歌学大系』別巻五所収）。

(2) 本書は『東京古典会 古典籍展観大入札会目録』（平成一四年）にも出品されていた。

(3) 『潮音堂書跡典籍目録』の書誌・解説文は佐々木孝浩氏のご教示により知り、後に実見し確認した。記して感謝申し上げます。

(4) 国文学研究資料館蔵『古今和歌集』以外に、若王子文書（東京大学史料編纂所写真帳三〇七・六二一四〇一）、住心院文書（東京大学史料編纂所写真帳三〇七・六二一・二二）、喜連川文書（東京大学史料編纂所写真帳三〇七・三二一三一一）所収の道興書状の筆跡および花押、『短冊手鑑』（日本古典文学影印叢刊一六、貴重本刊行会、一九七八年）所収の道興詠「衣恋」題の自筆短冊なども比較したが、いずれにも共通する筆跡と判断される。

(5) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』第七章（風間書房・一九八四年刊）参照。

(6) 『袖中抄の校本と研究』（橋本不美男・後藤祥子編、笠間書院、一九八五年）解題を参照し、国立公文書館で該本を閲覧した。『袖中抄の校本と研究』では、「第一 聖護院道興大僧正」と翻字してあるが、閲覧したところ、「道」と読んでよいと判断した。

(7) 『実隆公記』長享二年四月一三日条には「…自江州御幕下袖

中抄十一、十二、可書進上之由、二階堂折 相副之、自姉小路伝達到來、…」、一九日条には「姉小路宰相、堯盛法師等來、袖中抄書写事談合也、今日予彼抄立筆者也、」とあり、実隆は姉小路基綱等とともに「袖中抄」分担書写者となっていた。内閣文庫蔵内務省本に写されている「筆写目録」における実隆の分担書写箇所は十冊本の第六となっており、「袖中抄」二十巻を十冊本で書写すれば、担当箇所は「実隆公記」にある十一、十二と合致する。これは「筆写目録」の信頼性に寄与できる合致であろう。

(8) 「諸門跡伝」では大永七年(一五二七)七月七日九八歳選化とある(国史大事典)。

(9) 道興の事績、および次に挙げる文化的事績については、「日本大藏経」九六巻修験道章疏五「聖門御累代記」、「国史大事典」[道興]項、中世日記紀行文学全評釈集成第七巻(勉誠出版・平成一六年刊)の『廻国雜記』解説(高橋良雄氏執筆)を参照。

(10) 古典文庫465『中世百首歌四』(井上宗雄氏・大取一馬氏編、一九八五年刊)

(11) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期(改訂新版)』(風間書房・一九八四年刊)では折々で道興の活動にふれられており、また巻末の「室町前期歌書伝本書目稿」では道興の参

加した歌会が一覧できる。

(12) 松村雄二氏『セミナー原典をよむ6 百人一首 定家とカルタの文学史』(平凡社・一九九五年刊)

(13) 『廻国雜記』の歌の引用は前掲、中世日記紀行文学全評釈集成第七巻『廻国雜記』に拠り、清濁を私に分かった。

(14) 以下、歌語・歌枕に付す番号は、橋本不美男・後藤祥子編『袖中抄の校本と研究』(笠間書院・一九八五年刊)に拠る歌語の見出し番号である。ただし、歌語の立項の仕方は本書の実際とは異なっている場合がある。

(15) たとえば、南北朝以降の『源氏物語』梗概書の族出、「夫木和歌抄」等類題集からの抄出本、一条兼良『東京隨筆』に見るような説話抄出の態度が挙げられよう。伊井春樹氏「室町期の貴族文学と教育」(岩波講座 日本文学史)第六巻「一五・一六世紀の文学」(岩波書店・一九九六年)参照。

【付記】

資料の掲載をご許可くださった人間文化研究機構国文学研究資料館、ならびに閲覧・掲載・翻刻をご許可くださった東京大学文学研究室に、記して御礼申し上げます。なお、本稿は平成十九年度科学研究費補助金(若手研究B)による成果の一部である。